

田島正樹著『神学・政治論 政治哲学としての倫理学』（勁草書房）へのコメント

入不二基義

I. 読後印象から

- ・ 読後に異なる二つの田島像が残っていて、その二つの像の折り合いのつけにくさが、喉の奥に刺さった小骨のように気がかりである。
- ・ 一つの像とは、正反対であるかのように見える二つの項【信仰と無信仰など】のあいだの「移行」という往復運動を説き、実践しようとする田島像である（弁証法的な像）。
- ・ もう一つの像とは、創造や決断へと煽り駆り立て、「前のめり主義」「切迫主義」とでも呼べるような空気を濃厚に漂わせる田島像である（決断主義的な像）。
- ・ ちなみに、前者の「移行」という往復運動は、田島哲学のもっとも素晴らしい精華の一つであると思う（その中でもヨブ解釈は感動的）。しかし、後者の「創造や決断への煽り駆り立て」には、哲学的ではない（哲学とは独立の）個人的な性向やアジェンダ的な力の反映を、強く感じる。
- ・ この二つの像—「移行」という往復運動（弁証法的な像）と「前のめり主義」「切迫主義」（決断主義的な像）—のあいだには、ある種の違和が含まれているように思われる。両方向性のある、けっして一つの極端には収束しない「移行」という往復運動と、むしろ未来向きの強烈な一方向性を持つ「前のめり主義」「切迫主義」とは、そう簡単には接合できないのではないか。
- ・ いやそんなことはない、と言われるかもしれない。「前のめり主義」「切迫主義」の持つ創造や決断のエネルギーこそが、「移行」という往復運動を駆動し可能にしているのだ、と。しかし、このような折り合いのつけ方では、せつかくの収束なき「移行」という両方向的な往復運動が、「前のめり」「切迫」という一方向的な力の内に取り込まれてしまう。往復運動は、その一つの力の現れにすぎなくなってしまう。
- ・ むしろ、逆の考え方をすべきではないか。つまり、「前のめり」「切迫」という一方向的な力に対しても、「信仰」を突破するような「無信仰」（或いはその逆）があるのと同様に、逆向きの力（「後ろ向き」「弛緩」？）が対抗するのであって、その二つのあいだにおいてもまた、「移行」という往復運動が起こるのだ、というように。別様に言えば、「前のめり」「切迫」という決断主義的な態度に対しても、「中庸」のようなバランスが求められるのではないか。

II. 過去と未来

- ・ 決断主義的な「時間」は、「未来」を重視する。しかも、その「未来」は、既にある選択肢の実現としての未来ではなくて、全く新たな可能性の創造としての未来である。
- ・ そのような「強烈に前向きの」未来観は、その反面として、十分に「後ろ向き」になることができなくなる。すなわち、ある種の「過去」を抹消することになる。
- ・ もちろん、田島の議論の中にも「過去」が登場しないわけではない。しかし、登場で

きる「過去」は、たとえば、（これから引き起こすことと対照されて）「為された行為」のように合理的説明を持つ過去であり、未来創造（問題解決）のための素材やヒントを提供する過去であり、解読を待ち受けるテキストとしての過去であり、いずれにしても、現在や未来の方から意味づけられる「過去」である。

- ・ 一方、抹消される「過去」とは、現在の視点からの合理的説明を受け付けられないような「過去」、未来創造（問題解決）に何ら寄与しない「過去」、新たな未来の創造に伴って（その裏面として）破壊され葬られてしまわざるをえないような「過去」である。いずれにしても、現在や未来の方からけっして意味づけられない「過去」である。

- ・ 未来創造の裏面には過去の破壊が、問題解決の裏面には問題以前の抹消が控えている。創造と破壊、解決と抹消は、表裏一体であると同時に背反的であるが、決断主義的な未来重視の視線は、その一方を隠蔽する。

- ・ 「強烈な前向きさ」は、ある種の「過去」だけではなく、ある種の「未来」をも消し去る。それは解かれるべき「問題」や「課題」にさえなっていない「未来」であり、現在とは無関係である（関係をいっさい取り結べない）「未来」である。「未来」からは、現在とは無関係にその時点でただ到来するのみという点を消し去ることはできない。にもかかわらず、「問題解決」という視線は、「問題」「課題」という仕方で現在と繋がった「未来」にばかり固着する。

- ・ 現在と無関係な「未来」など、現在にとってまったく問題にならないのだから、無意味であろうと言われるかもしれない。たしかに、人間主体にとっては、或いは実存的な態度にとっては、そうかもしれない。しかし、人間主体（実存）にとってという相関性は、時間の半面にすぎない。時間には、人間主体（実存）の関与を無化するという半面がある。つまり、「問題」「課題」という仕方ですら現在と繋がっていないことによってこそ「未来」である。そういう（非人間的な）側面が、「未来」には含まれる。

- ・ このように、「強烈に前向きな」決断主義は、人間主義（実存主義）であることによって、過去や未来の非人間的な側面を抹消する。

III. 排中律と全体性、或いは実在論 VS. 反実在論

- ・ 反実在論を説き、実在論やその基礎で働いている排中律や全知（全体）性を退ける田島の議論は、きわめて明解である。しかし明解であるだけに、そこには何らかの単純化や隙間が含まれているように思われる。

- ・ たとえば、排中律について。排中律は、田島が言うほどには（cf. p.76）、「(肯定・否定の) 対称性」に囚われてはいないのではないかと。むしろ、田島が強調する「(実在・不在の) 非対称性」にも、排中律は深く関与する。排中律は、「対称性」だけに基づくのではなく、「非対称と対称の闘ぎ合い」に基づいている。言い換えれば、排中律は、「言語的な弁別機能」の圏域内に収まるものではなく、言語と実在の狭間を問題化するような論理法則である。

- ・ たしかに、排中律は肯定・否定の分割によって全体を立ち上げる。しかし、初発ではまだ、その全体は一定の「ドメイン」にすぎない（ex. 「白いか白くないかのどちらかである」の場合には、「色」というドメイン）。重要なのは、そのドメイン自体にもまた排中律が適用されて、そのドメイン内であるかないかのどちらかである（ex. 色を持つか持たないかのどちらかである）という具合に、＜排中律は成長・拡大する＞という点である。その「強化された排中律」は、ドメイン（ex.色領域）の内と外を分割することによって、ドメインを拡大し（ex.延長体？）、新たな全体を立ち上げる。そして、その新たな全体にもまた、排中律がさらに回帰し、全体もまた強化される。
- ・ この「強化された排中律」は、「非対称性」をも巻き込んで成長・拡大する。田島の言うとおり、意味や本質が顕わになった実在（現象）と、そもそも顕わにならないこと、或いは実在の不在とのあいだには、根本的な非対称性がある。たしかに、素朴な（初発の）排中律は、前者（実在）内部での肯定・否定の分割にすぎない。しかし「強化された排中律」ならば、前者（実在）と後者（その不在）の非対称な分割をも取り込んで、更なる全体を構成しようとする。
- ・ ちなみに、田島自身の次のような表現の中にも、実は排中律が働いている。或いは、ここで働いているものまで含めて、排中律の問題と考えたい。
- ・ 「決断とは、しばしば二つの選択肢の中から一つを選ぶことではなく、不決断を退けて決断を選ぶことなのである。（中略）事態に直面しさえすれば、一つしか途はないのだ。その事は、実際に決断した後に初めてわかるのである」（p.255の注7）。
- ・ 二つの選択肢のあいだで働くのではなく、決断と不決断の非対称を跨いで働く排中律こそが、「強化された排中律」である。そう考えるならば、「決断」や「創造」もまた、排中律から自由になった行為ではなく、むしろ排中律自体を更新・強化する行為である。
- ・ 排中律の成長・拡大という考え方は、「全体性」について、次のような示唆を与える。排中律が呼び出す「全体」は、必ずしも「神の全知のもとでの完結した全体」である必要はない。全体は「とりあえずの全体」であり、更新され強化される運命にある。しかしそれでも、全体は全体であって（全体として機能するのであって）、「全体などない」とか「全体は幻想にすぎない」というのとは、決定的に異なる。
- ・ また、「とりあえずの全体」は、「信念や解釈などは全体論的なあり方をしている」と言う場合の「全体」とも異なる。いわば、「強化された排中律」が立ち上げる全体とは、「神の全知のもとでの完結した全体」でもなく、「信念・解釈などの全体論的なあり方」でもなく、両者の＜中間＞に位置するような全体性である。それは、端的な神の事柄ではない（ありえない）が、単なる人間的な事象（意味的次元）には収まらない。
- ・ 田島がパラドクスや矛盾の問題を論じる箇所（cf.pp.206-208）に対して、「とりあえずの全体」（に相当するもの）を、読み込むことができる。
- ・ 嘘つきのパラドクスが、「前言撤回」や真偽の「振動」という考え方によって解除されようとするときに、いったい何が起きているのだろうか。ここに、「とりあえずの全体」

（に相当するもの）が働く余地がある。

・ 「私の言うことはすべて嘘だ」が、矛盾であるかのように見えるのは、そこに含まれている時間差（隔時性）が潰されて、あたかも同時的に（或いは無時間的に）「すべて」が働いているかのように錯覚するからである。時間差（隔時性）を回復すれば、真偽のあいだでの「振動」が起こっているだけであって、矛盾にはならない（ちなみに、うそつき文のこのような解決法は、真理値の交代周期・循環を利用した、H. G. Hertzberger の Naive Semantics の中に見られる）。

・ たしかに、「振動」という考え方を導入すれば、同時的（無時間的）な「全体」は錯覚として退けられる。しかしだからといって、「全体」概念が完全に退けられているわけではない。仮に「全体」概念が完全に退けられるとするならば、そもそも「振動」が「振動」としてすら成立できなくなるはずである。なぜならば、「振動」は、たとえ完結はしなくとも、「真偽真偽……」という二極周期の「限界」内にあることを、見て取ることだからである。ここでは、振動・交代という運動自体がそのつど「全体」を立ち上げていると同時に、その「全体」を先取りすることによって、振動・交代は振動・交代として認知される。そのような自転車操業的な「全体」概念が、「とりあえずの全体」である。

・ それでは、「強化された排中律」「とりあえずの全体」の観点からは、実在論 VS. 反実在論の対立はどうなるのか？

・ 実在論と反実在論の対立は、そのどちらかを選ぶという択一的選択の問題ではなくなる。むしろ、両者の中間、或いは両者の間での「振動」や「移行という往復運動」が正解として選ばれるべきであり、両者はその運動を構成するエレメントとなる。「強化された排中律」「とりあえずの全体」の観点は、そのような「中間」「両極間の振動」を指し示す。

・ 最初に述べた「二つの像」の折り合いの悪さとは、「移行」という往復運動の強調と、（実在論を拒否して）反実在論のみを選択することとの相性の悪さでもある。

・ ヨブが、信仰を通してこそ無信仰へと突破できるのと似たような事態が、実在論と反実在論のあいだにも成り立つのではないか。たとえば、実在論へと向かう強いベクトルがあつてこそ、反実在論の含意を悟得することができる（或いはその逆）というように。

IV. 最後に(もう一つの印象として)

・ 田島本の真の魅力は、II や III で見てきたような哲学的な諸論点についての「内容」とは、実は独立であるように思われる。

・ その魅力とは、言うまでもなく、深みとこくのある文体であり、縦横無尽かつ自由自在に展開される人文的教養である。

・ これらの魅力と、哲学的議論内容とは切り離せないと思なす者もいるだろう。しかし、私は、両者は相対的に独立であるという印象を持つ。つまり、田島の魅力は、別のジャンルの本を書いたとしても、内容は哲学ではなくとも、同じように（いや今以上に）発揮されるのではないか。そのように思われるのである。